熊野の森から

怪しの熊野

其の二十一「幽霊」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

日本では8月中旬に「お盆」がある。欠かせないのが、怪談や幽霊話。先祖の霊と交流できるという特別な時期であり、本来は怖い話とは関係ない時期なのであるが、悪霊や怨霊まであの世からやって来るかも知れないと、怪談話が聞かれるようになるのがお盆なのであろう。

筆者が撮影した「心霊写真」。窓の中にたくさんの顔のようなものが見える。ざっと数えただけで10を越える。三つの点があると顔に見えてしまうという「シミュラクラ現象」なのであろうが、本物の霊が映ってしまった写真だとしたら恐ろしい。

幽霊は妖怪とは違う。妖怪は場やモノに憑(つ)くが、幽霊は人やコトに憑く。妖怪は、こちらから棲(す)みかに近づかない限り出遇うことはないが、幽霊は向こうからやってくる。だから、金縛り、不審な音を聞いたなどの経験を持つ人は非常に多い。金縛りから目がさめたら、落ち武者の霊が乗っていたとか、白装束の髪の長い女が悲しげにしていた、などの話は至る所で聞かれる。

1776年(安永5年)、絵師の鳥山石燕(とりやま・せきえん)が『画図百鬼夜行』で描いた幽霊の姿。この絵のように、多くの幽霊の姿絵で、額の三角巾が描かれ、逆に足は描かれていない。(国会図書館近代デジタルライブラリーより転載)

筆者にも金縛りの経験もあるし、不思議な音を聞いた経験もある。ある時の夜、植木屋さんの職人さんの詰め所2階の座敷で、5名ほどで地区の祭の相談をしていた。話しは長引き、そろそろ9時になろうとしていた頃、トントントンと階段を上ってくる軽快な足音がした。皆が階段のある方の襖（ふすま）に目がいった。誰も襖を開けて入ってこない。かといって階段を下りていく気配もない。詰め所は人里からは少し離れた場所にあり、私達5名以外は誰もいなかったはず。酒は誰も飲んでいなかった。皆でジャンケンし、負けた私が襖を開けて確認する役割に当たった。恐ろしかったが、エイヤーと襖を空けたが、誰も居なかった。階段は1カ所にしか無かったので、皆で並んで降りて解散した。音の正体はネズミだったかも知れないし、誰かの悪戯（いたずら）だったかも知れない。だけど、恐ろしかった記憶はいつまでも残っている。

妖怪に遭遇する人がほとんど居なくなった現在でも、幽霊は別のようだ。真偽はさることながら、心霊写真などもたくさん撮影され続けている。熊野の代表的な妖怪のダルは行き倒れた亡者が化けたモノだと聞く。河童も子どもの水難亡者と関係しているという。熊野には亡者から妖怪に変じた怪異は多い。近年の都市伝説のような幽霊話だけでなく、お盆には、それら古くからの亡者の霊に遭遇する可能性が高まるので、くれぐれも取り憑かれないように注意してほしい。

中島敦司(なかしま・あつし)教授プロフィール
昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。51歳。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗(妖怪、伝承)。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。